書　評

時　と　暦　　青木信仰 著

本書は近来稀に見る快著であり，天文学を志す人は勿論，一般教養の書としてどなたにも一読をおすすめしたい．

私共の日常生活に密着しすぎているために反って何の考えもなく使っている時間とか時刻とか“こよみ”について，本書では明快に正確に，しかも比較的判り易く説かれており，これを通読することによって洋の東西を問わず私共の先人達のたゆみない観測努力と思考研究の結実であることがよく呑みこめるようになっている．時とか“こよみ”の仕組みが，諸学の中でも最も古くからあるものの一つとして数えられている天文学の研究成果に支えられていることにも十分に納得させられる．

はしがきにもあるように，本書は一般の読者を対象としたものであると断ってはあるが，ただの読物とは一味も二味も異ったものであり，かりに活字のポイントを下げて述べられている部分を飛ばし読みしても，週刊誌でも読む積りで本書に臨んだら恐らく目の玉が引っくり返ってしまうかもしれない．論理と正確さとを旨とする天文学に支えられた内容であり，加えて著者自身がその権化と言ってもよい程の理論家であるだけに本書の記述は極めて正確である．反面そのためにいわゆる一般読者(というよりは素人読者)にとっては固苦しい感じを与える恐れありと感ずる部分が随所に現われている．このことを承知の上でこの書を読破すれば，時と暦についての十分な基礎知識を身につけることができ，これから先専門家の話を聞いても何とかついて行けるようになる．

本書内容表現の正確さにはただただ驚嘆するばかりで，私だったらおそらく 10 年の歳月をかけても完成できないであろうと思える程綿密な調査研究がなされている，例えば古い時代の学者の年表にしても十分な考証がなされたあとがあり，記述内容の出典を極めて明確に示してあるのが嬉しい．また調査が不十分である場合にはその旨を明記してあるのは著書の人柄を示すものであり，本書を読んでいると著者と対談でもしているような気分に陥ってしまう．

著者と私とではその専門分野でかなり共通した所があるだけに比較的長いおつき合いがあり，著者の持つ学問的思想や気持のあり方，また著者のユーモア精神も理解している積りであるだけに，つい誉め言葉ばかりになってしまったが，欲を言えばもっと一般読者向けに徹して貰いたかったと思う．例えば第 3 章の 3，グリニヂ天文台創設の部の後半とか，第 5 章では 3 の後半と 4 についてはもう一工夫こらして誰にも親しみ易い表現にすることができなかったかと惜しまれる．

第 5 頁末尾から 6 行目に“学際的研究”という表現があるが，本書の通読をおすすめした知人にこれは何を意味するのかと質問されてびっくりした．金田一京助氏外共著の新明解国語辞典 181 頁に出ている程度の説明を( )づきで入れてあればより親切であったと思う．

これは私の好みによるかもしれないが，本書を繙くに当っては，まずはしがきの部，次に目次を読み，次には変則的ではあるが第 270 頁のあとがきに目を通してから序章，第 1 章，……と読み進む方が理解し易いように思う．

ゴキブリが一匹見つかれば，彼等の実数はその数十倍であると言われるが，この著書にはこの言伝えがあてはまらない．105 頁末尾から 3～4 行目はヴァイル・デア・シュタットの居酒屋……とあるべきであるのが“屋酒屋”になった誤植は全く惜しい．私の見る限りでは誤植はここ一つだけである．屋酒屋で飲むワインより居酒屋でたしなむワインの方がずっとうまいし，情緒がある．一つの誤植は万慮の一失というより御愛嬌であると受取めたい．　　(弓　滋)

雑　報

「恒星外層物理研究会」報告

「active な姿を持つ星」というテーマのもとで，今年の 1 月 27 日，28 日，29 日の 3 日間にわたって，上記研究会が東大天文学教室で開かれた．今回が通算 3 回目で，上記研究会のシリーズは本年で最後となる．

26 講演があり，その内容は多岐にわたっている．Review Talk を順に拾ってゆけば，stellar activity (山崎)，フレア星 (小平)，晩期型星と質量放出 (渡辺)，ミラ型と共生星 (前原)，Star Formation (磯部) (以上，27 日)，Be 星 (小暮)，X 線連星 (柴崎)，Astro B による恒星の観測 (井上)，Chemically Peculiar Stars (定金)，early B 星の pulsation (安藤) (以上，28 日)，激変星の観測 (岡崎)，nova の理論 (藤本) (以上，29 日) となっている．

29 日の午後からは，Astro B による観測について，田中氏による説明，紹介があったのち，恒星観測の将来の方向と題して提言者それぞれの発言があった．しめくくりとして，尾崎氏の恒星の activity を記述する第 3 の parameter としては何が本質的であるかという問を種として，議論が展開され，今後の観測の方向などとも考え合わせて，様々な意見が提出された．　　(李　宇珉)